

水路旅

歴史をたどる
真っ直ぐに伸びるトンネルの、遥か向こうのかすかな光。それは、明治期に成し遂げられた奇跡の光でした。今も京都に「命の水」を運び続ける琵琶湖疏水は、歴史の偉業を語り続けるトンネルを抜け、桜や新緑、紅葉に彩られる山裾を縫って、ゆるやかに進みます。約70年の時を経て復活した観光船「びわ湖疏水船」に乗り、疏水沿いを歩くことで触れられるのは、明治の偉業から生まれた、京都と大津の知られざる魅力です。

1 京都と大津を繋ぐ「希望の水路」
日本の都であった京都は、明治維新の事実上の東京遷都によって、人口が3分の1も減少。まちの再生を図るため、京都と大津をつなぐ琵琶湖疏水の建設を第3代京都府知事 北垣国道と若き技術者 田邊朝郎に託しました。

2 暮らしとまちを大きく発展させた水力発電
第1疏水の完成で人々の暮らしを最も変えたのが水力発電。蹴上で日本最初の事業用水力発電所が稼働すると、まちに電灯が灯り、中小工場の機械化が進んだほか、日本初の電気鉄道（京都電気鉄道）がスタートしました。

3 琵琶湖から大阪までを繋いだ舟運
第1疏水の完成により、大津から京都まで大阪までの舟運が開き、物流の拡大が経済と産業の発展につながりました。舟運は今、観光船として第1疏水をたおやかに進み、琵琶湖疏水の魅力を間近に感じさせてくれます。

4 防火用水と日本屈指の近代庭園群
京都御所の防火のため、御所水道ポンプ室がつけられたほか、岡崎地域には近代最高峰の作庭家小川治兵衛の手により疏水の水を利用した日本屈指の近代庭園群が形成。無鄰庵は明治期を代表する庭園です。

5 蹴上浄水場からの安全・安心な水道水の供給
「京都を再生と飛躍に導いた琵琶湖疏水」の一環として進められた第2疏水の建設は、明治45(1912)年に完成し、同年には、豊富な水資源を利用して、蹴上浄水場から日本初の「急速ろ過」方式による水道の供給が始まりました。

6 時を超えて今も生き続ける琵琶湖疏水
京都を再生と飛躍に導いた琵琶湖疏水は我が国の近代化を伝える貴重な産業遺産です。この壮大な事業が、今も京都のまちと暮らしを潤し続け、時を超えて息づいています。

各ストーリーについて詳しくは、琵琶湖疏水日本遺産特設サイトにて紹介しています。
<https://biwakososui.city.kyoto.lg.jp>



琵琶湖疏水沿いで出会う扁額

「扁額」とは明治の元勲をはじめとする先人たちの揮毫で、石に文字を彫り込んだ額のこと。第1疏水のトンネルなどに設置されています。揮毫文は、中国の古典などから引用され琵琶湖疏水の完成を称えています。趣向の凝らされたデザインも見どころです。

A 廓其有容
(かくとしてそれいふことあり)

意味 疏水をたたえて悠然と広がる大地は、すべてを受け容れる器を有している
揮毫者 山縣有朋 (初代内務大臣)

B 仁以山悦智為水飲
(じんはやまをもちてよここび、ちほみずのためによろこぶ)

意味 仁者は動かない山によここび、智者は流れゆく水によここぶ
揮毫者 井上馨 (初代外務大臣)

C 第2トンネル出口 隨山到水源
(やまにしたがいて、すいげんにいたる)

意味 山にそって行くと水源にたどりつく
揮毫者 西郷従道 (初代海軍大臣)

D 第3トンネル入口 過雨看松色
(かうしょうしよくをみる)

意味 時雨が過ぎるとちだんと鮮やかな松の緑をみることができ
揮毫者 松方正義 (初代大蔵大臣)

E 第3トンネル出口 美哉山河
(うらわしきかなんが)

意味 なんと美しい山河であることよ
揮毫者 三条実美 (初代内大臣)

